

令和4（2022）年度前期
授業評価アンケートの結果と分析及び提言
—PDCA サイクルに向けて—

教養教育院総務委員会委員長
岩田 貴

目的

大学教育に関しては、教育目的・目標の明確化やその到達度、さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために、学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第3期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、双方向のPDCA サイクルを確立し、徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

令和元年度から毎回すべての授業科目群を対象として期末に実施している。本年度も同様に実施することとした。3月28日から徳島県のとくしまアラートが「感染観察」になったことに伴い、前期開始からBCP レベル1となった。教養教育では、第1週目の授業は（可能な限り第2週目の授業も）遠隔授業として開始し、それ以後も感染防止対策を徹底しながら対面の実施を可能とした。しかし、対面授業を実施する場合には講義室定員の50%が上限であるため、受講者の多い授業ではすべて遠隔授業で実施することとなった。7月下旬からは新規感染者数が増加し始め、いわゆる第7波の入り口となった。

今回のアンケートは令和4年7月11日～8月10日に実施した。教員に対しては、授業実施報告書の提出（令和4年9月末まで）として実施した。昨年度と同様に、通常の項目に加えて遠隔授業で良かった点と不都合の有無を尋ねる項目を自由記述式で追加した。

結果と分析

1) 回収率

令和3年度から従来の8科目群が再編成され4科目群となった。前期の期末アンケート回収率の平均値（令和3年度）は、教養科目群57.93%（68%）、創成科学科目群52.84%（64%）、基礎科目群47.45%（58%）、外国語科目群63.93%（69%）であった。昨年の令和3年度前期よりすべての科目群で低下しており、コロナ禍以前よりも回収率が低い状況が続いている。科目群の違いよりも個々の授業による違いが大きいことは例年と同様であった。回収率低下はオンライン授業によるアンケートの説明不足が原因の一つと考えられ、各教員に周知徹底を依頼しているが、改善は見られていない。アンケート結果の授業題目へのフィードバック効果の重要性を教員、学生共に再認識してもらうよう啓発し、さらに対策が必要である。

2) 受講環境について

令和2年度前期から遠隔授業を中心にする方針が続いているため、受講環境に関する調査の一つとして、今回も遠隔授業で良かった点と不都合があった点を追加した。今年度は対面授業も一部実施されたことから、時間割の都合で遠隔授業を学内で受講する場合も多いことから、多様な受講環境を反映した意見が見られた。

遠隔授業でよかった点についてのコメントは、感染リスクの不安がないことや通学等の時間節約ができることなどの利点に加え、自分のPC等で資料を閲覧できること、教員の声が聞き取りやすいこと、オンデマンドでは講義を繰り返し視聴できることなど、授業の理解促進に関する意見が目立つようになった。コロナ対応3年目で遠隔授業についての教員のスキルや学生の対応力が向上したようであり、遠隔授業の利点を積極的に活かして学修に役立てる体制が整いつつあることがわかる。遠隔授業を効果的に活用した具体例としては、教員が様々な質問をしてその結果をリアルタイムでグラフ化して情報共有したり、チャット機能を用いてその場で質問させることで、ほかの学生が分からないところも知ることができる、対面授業であっても、授業の様子を撮影して、後日配信する、などがあった。

遠隔授業による受講環境の不都合な点としては、インターネット回線の不具合に起因するトラブルの報告が昨年度と同様に非常に多かった。パソコンの操作に慣れていない、機器の不具合に対応できないというコメントはBYODが浸透したためか減少傾向にあったが、一定数存在した。回線や機器の操作に関するトラブルは学生ばかりでなく教員にも発生することがある。教員の多くは昨年度から遠隔授業の実施経験を重ねているが、このように学生と教員の双方にそれぞれトラブルのリスクがあることを考えると、すべての授業を常に最善の状態を実施することは困難である。音声や映像が途切れると理解の妨げになるのは当然であるが、内容の理解以前の問題として、資料などのアップロードが遅れるなど、重要な通知を聞き漏らしたり、課題の解答の送付先が統一されていないなどで混乱して、提出が遅れるなどにより成績評価に影響することへの不安も大きいようである。また、学生同士あるいは学生と教員とのコミュニケーションに関しては、令和2年度前期では対面授業とは異なる状況に置かれて戸惑っている様子を感じられる意見もあった。同じ授業を受講している学生の様子がわからないなど、孤独感を示す意見が散見されたが、グループディスカッションや、チャット機能を駆使したため、孤立感に関する意見はなかった。対面授業よりも遠隔授業の方が良いという意見が増加しており、今後の授業設計においてオンデマンド授業などを取り入れることを検討する必要がある。本年度前期のようにBCPレベルによっては対面も可能となった授業も多くなったため、対面授業と遠隔授業が混在する時間割となり、遠隔授業は自宅で受けたい学生の移動時間の問題や、学内で遠隔授業を受講する場合の教室や語学のための個室も想定しておく必要がある。学内のWi-Fi環境は順次改善が進められているが、接続不良は今期も少なからず存在しているため、さらに設備の充実を進めるとともに、時間割編成についても検討が必要である。

3) 教員の授業に対する取り組みについて

自由記述のコメントに基づいて特徴的な授業方法を例示する。良かったという意見が多かった遠隔授業の例として、対面授業であっても、その授業を撮影し、後日動画コンテンツとして異時配信して、復習を促す授業がある。オンデマンドコンテンツを通して自分のペースで授業の復習が可能で、ライブ授業での漠然とした疑問をオンデマンドコンテンツで解決したり、改めて疑問点をより明確にして後日質問しやすいということで、学生の満足度が高く、両方式の利点を活用した例といえる。一方、オンデマンド授業では学習意欲がわきにくい、たくさんの授業でオンデマンドコンテンツや反転授業の視聴があり、しかも課題を課されているので、大変といった意見もある。対面授業を中心とした授業の一つで、「濃密な授業内容である一方で、やはりすべてを理解するには時間が足りない」と個人的

に感じました。また自分はノートの取ることに必死だったので、授業を聞いたそばから理解するのは少し難しかったように感じました。」というコメントが見られた。また、「できればすべて対面がよかったと対面を経験して思った」とのコメントがあった一方で「一方的な授業だったので遠隔で行えたのではないかと思う。」、「各講義の授業内容が重複しており、意義を感じなかった。授業で個人が出したレポートについてのみを述べる講義が必要ないと思った。」、「先生によっては言葉が早口で聞き取りづらい場合があり、話す内容も同じことばかりだった。」など久しぶりの対面授業になったため、教員の対面授業のスキルを改めて見直す必要があると感じられた。今後は、オンデマンドを含めた遠隔授業と対面授業のそれぞれの利点を活用することが期待される。例として、対面授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリッド形式も一部の授業で実施されている。この場合は「前回の授業内容や課題の質問があるときは次の授業で大学に来て、対面で受けて、直接質問ができた。」というコメントに見られるように、このような工夫は対面授業とオンライン授業がモザイク状になった時間割の問題を解決する一助になる可能性が伺われる。また外国語の授業では、ブレイクアウトルームでのグループワークを頻繁に行うことで、発音練習が可能となり、学生同士のコミュニケーションが取れたなど、遠隔授業の利点を活用している点で学生から多くの高評価コメントがなされている。中には、従来型の講義をオンラインで実施している授業もある。遠隔授業で一方的な講義を90分連続すると集中力やモチベーションが続かないという意見も一定数ある。効率的に情報を伝達するという目的には従来型の講義形式が適しているが、特に大人数の遠隔授業では学生が集中できるように何らかの工夫を考慮することが望ましいと考えられる。

4) 学生の授業に対する意識

感染対策が求められる状況が長く続き、学生にとっては遠隔授業が通常の授業形態であるかのように受け入れられてきており、BCPレベルが下がり従来の対面授業も可能となった今年度の前期では教員、学生共に戸惑いを見せた部分もあった。教員の多くが遠隔授業に慣れ、遠隔授業の利点を活用した授業が増加したことから、学生の意識も遠隔授業を肯定的に捉える傾向が強まっているようである。ライブ形式の遠隔授業では対面授業と同等あるいはそれ以上の評価をしている学生も多い。オンデマンド形式の授業については、時間割に縛られないことや繰り返し視聴できるという利点は認識されているが、一方的な受け身になりがちであることから、ライブ形式も併用してほしいという意見も増加傾向にある。また、ライブ形式であっても毎回出席確認の小テストなどを課す授業が多く、この方法に対するコメントからも学生の授業に対する意識を読み取ることができる。毎回のオンライン授業を受けるモチベーションになるという意見や、「小テストによってより深く考えるきっかけになった」という感想もあり、遠隔授業の課題をきっかけとして大学での学びの意義を見出していることが窺える。一方的になりがちな講義において学生の意欲を喚起するための参考になる意見である。

総括

昨年度から続く感染対策ではあったが、本年度前期は遠隔授業と対面授業が混在することとなった。遠隔授業に慣れた教員が工夫することで効果的な授業が増加しているようである。その一方で、対面授業の重要性も学生・教員の双方で改めて認識されている。遠隔授業のメリットをさらに充実させて対面授業と組み合わせることを検討する必要がある。今後も引き続きアンケート等を活用して、改善のサイクルを進めていくことが重要である。

提言

アフターコロナに向けた授業実施方法の再検討が引き続き望まれる。昨年度後期のアンケート分析において以下の提言をまとめたが、本年度も大きな変化は見られず、引き続き検討が必要であるため再掲する。

1. 大人数の講義では遠隔授業の利点が多く示されており、アフターコロナでも継続することが妥当と考えられる。ただし、コミュニケーション不足等の問題点もあるため、クラス規模で一律に決めるのではなく、授業の目的や内容に応じて部分的に取り入れるなど、柔軟に考える必要がある。
2. オンラインコンテンツの充実により、反転授業を容易に実施できるようになった。アフターコロナにおいて対面授業主体に戻った場合、コンテンツを活用した多様な授業設計が望まれる。
3. 学生は教員が独自に工夫した実施方法をしっかりと評価し、改善してほしい点も評価方法だけでなく授業方法にまで踏み込んでアンケートに記載しているので、教員は真摯に学生からの評価を各授業に反映させてほしい。
4. 教養教育院としても評価の高かった授業題目の工夫されている点や、評価が低かった点について教員間で情報交換を行い、継続的にフィードバックするFDなどの場を設けたい。
5. 遠隔授業を実施する場合には、ポータル（学生からの入口）を明確にする必要がある。各授業への入口が異なると学生が混乱する恐れがあるため、可能な限り同一のポータルを利用できるように統一することが望ましい。
6. 学内で遠隔授業を受講するためのスペースやWi-Fiの充実などの物理的環境を整えると同時に、周囲を気にせずに発語が可能なスペースを設置することが望ましい。
7. 対面授業とライブ形式の遠隔授業が混在する時間割の問題点が多数指摘されているため、対策が必要である。学内で遠隔授業を受講するためのスペースやWi-Fiの充実などの物理的環境を整えると同時に、例えば曜日によって対面または遠隔（ライブ形式）の日を設定するなど、時間割そのものを見直すことも含めて考えるべきであると思われる。